

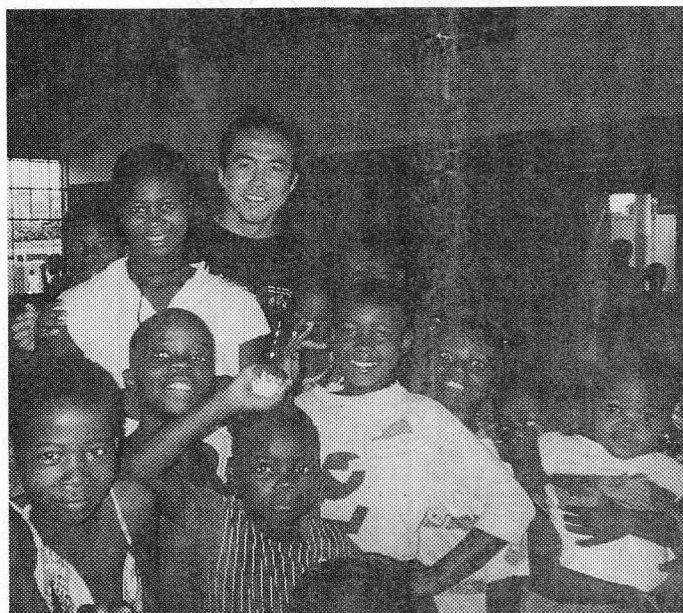
アムダリポート



AMDA
アムダ

大洪水が発生したモザンビークで、3月下旬に展開した緊急援助活動で調整員を務めた菊池寿晴さん(34)は、今回初めてAMDAのプロジェクトに携わった。青年海外協力隊の調整員として今年2月までの2年間、エチオピアに派遣されていた実績が買われ、AMDAから声が掛かった。菊池さんは「地元を受け入れられ、被災者への医療活動がきちんとできたのがうれしい。貢献できたという充実感がいっぱい」と振り返る。

宮城県在住。同県農業短大を卒業後、米国へ農業研修を行った。青年海外協力隊員として1991年12月から2年間、パプアニューギニアで活動するなど海

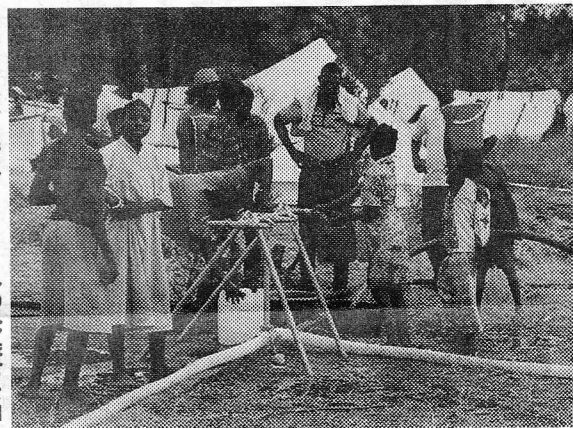


モザンビークの子供らに囲まれる菊池さん

外経験は豊富だ。

モザンビークは今年初めからの3月上旬までの断続的な豪雨によって、大洪水に見舞われ、被災者約33万人、死者約500人が確認されている。高さ2層の濁流に都市がのみ込まれ、家が押し流された。3月19日に現地入りした菊池さんも「車で各地を走ったが、土砂崩れや道路の陥没などが目立ち、被害の大きさを物語っていた」という。

菊池さんは緊急救援チームが診察の場を開設するた



大洪水で家を失い、キャンプ生活を送る被災者

の医療活動を集約する保健省と折衝を重ねた。その結果、首都マプト市内の被災者キャンプ場と、マプトから車で30分の位置にある地元の診療所の2カ所を確保。3月23日から27日午前中まで、日本人医師2人が延べ300人の診療に当たった。大半が風邪の症状だったが、衛生状態が悪いため、マラリアの可能性もあるという。

「海外で一番困るのは言葉の問題。英語はある程度話せるが、現地はポルトガル語。通訳をどうしようかと頭を痛めたが、偶然利用したタクシー運転手が英語もでき、本当に助かった。医師から被災者への病状説明なども通訳してもらい、地元の人の信頼を得た」と話す。献身的な活動が人気を呼び、AMDA派遣の第2弾であるザンビア支部の医療チームが4月3日に現地入りした時、大歓迎を受けたという。

菊池さんは4月5日に現地を離れたが、「AMDAの活動理念は共感できる。今後調整員として不可欠な交渉能力をもっと高め、プロジェクトに協力していきたい」と今後の目標を掲げた。



被災者を診察するAMDAの医師